様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５３７０４１５

研究課題名（和文）オセアニアにおけるポストコロニアル文化形成と先住民移民文学―環境・共同体・芸術

研究課題名（英文）Postcolonial Formations and Indigenous / Immigrant Literature in Oceania: Environment, Community and Arts

研究代表者
小杉　世（KOSUGI, Sei）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：４０３２４８３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は変貌を遂げつつあるオセアニア諸地域の先住民・移民コミュニティのあり方を、文学・視覚芸術・舞台芸術による共同体形成や、環境問題に関する言説形成、テロリズムなどの現代社会の問題に注目して考察した。オセアニアにおけるポストコロニアル文化の形成を、地域研究や文学研究の枠をこえて超域的に捉え直し、ポストコロニアル研究の基盤と、マオリ語をはじめとするオセアニア諸語の運用能力を生かして、地政学的に論じるものである。日本も視野におき、核や原発に関する環境文学や冷戦時代の太平洋核実験、大国の経済活動がもたらす搾取とそのひずみ、植民地状況とポストコロニアル状況に声を発する文学やアートを検証した。

研究成果の概要（英文）：This research project examines the aspects of postcolonial formations in the indigenous and immigrant communities in different countries in Oceania by focusing on the roles of literature, visual arts and theatrical (performing) arts in community formation, the social problems of contemporary society such as terrorism and the formation of environmental discourses. This study tries to reconfigure postcolonial cultural formation studies beyond the frameworks of regional studies and literary studies, analysing the issues geopolitically from cross-boundary perspective, based on postcolonial theories and command of indigenous languages in Oceania. This research explores the art works and literature which criticise the colonial and postcolonial situation at the era of globalisation and discusses the environmental literature about nuclear testing conducted in the Pacific during the cold war in context of Japanese contemporary arts which deal with nuclear issues concerning nuclear power plants.

研究分野：人文学、ポストコロニアル研究、オセアニア研究、英語圏を中心とする現代文学、先住民言語文化研究

キーワード：オセアニア　ポストコロニアル　ニュージーランドの南太平洋系移民　サモア・タヒチ・マーシャル諸島・キリバス・PNG　オーストラリア　核文学　舞台芸術　環境

１．研究開始当初の背景

2004年の在外研究時から4年間に渡って、ニュージーランドのワイカト大学を拠点にマオリ語を学び、先住民言語教育機関における観察調査を通して、先住民言語文化復興運動と文学生成の関係を考察、ニュージーランド・オーストラリア・フィジー、サモアなどの第一世代の作家の作品の分析、先住民医療の調査などを行い、前科研（2010～2012 年度）では、とくにオセアニアの演劇に焦点をあてるようになった。これまでの調査はニュージーランドほか英語圏のポリネシアが中心であったが、本科研ではオセアニアにおけるポストコロニアル文化形成をより包括的にとらえるため、フランス語圏や日本との関わりの深いミクロネシアにも目を向けたく思った。分析の対象としては、文学テクスト以外のものも扱う必要性が生じてきた。

２．研究の目的

本研究は、オセアニアにおけるポストコロニアル文化の形成を、地域研究や文学研究の枠をこえて超域的に捉え直すことを目的とする。これまでに築いてきたポストコロニアル研究の基盤と、マオリ語などのオセアニア諸語の運用能力を生かして、地政学的に論じるものである。変貌を遂げつつあるオセアニア諸地域の先住民／移民コミュニティのありかたを、文学・アート・メディアによる共同体形成や、先住民医療、環境問題に関する言説形成などに注目して考察する。日本で現在、関心の寄せられている核や原発に関する環境文学や、冷戦時代の太平洋核実験などに関する文学について考察する。植民地時代・グローバリゼーション時代のポストコロニアル状況に声を発する文学やアートを検証する。本科研では将来的に翻訳による新しい文学の紹介を念頭におき、その準備をすることも目的のひとつとする。

３．研究の方法

前科研では、演劇はおもにテクストの分析を中心とし、マオリの先住民文化復興運動の時代の演劇などを扱ったが、今回は、現代の南太平洋移民の文化形成のプロセスとしての演劇をコミュニティにおける上演を視察することによって、またダンスなどの必ずしも言葉によらない舞台芸術、とくにテクストや録画画像の形で残らない舞台劇術をリアルタイムで視察することにより、観客が果たす役割も含めた劇場空間論を展開した。できあがった舞台作品だけでなく、インタビューや制作過程の参与観察による考察も含む。またフランス語圏のオセアニア文学についても、現地での文学祭などに参加することによって、作家と直接の接触をもつ機会を得て、インタビューなどを行った。核をめぐる歴史については、ニュージーランド、仏領ポリネシア、フィジーにおいて、文献調査を行った。

４．研究成果

(1)現地調査・資料収集など

1 年目：オーストラリア、ニュージーランドにおいて、南太平洋系・アジア系演劇の視察とインタビュー、オセアニアの非核運動に関する視聴覚資料の調査を行った。マーシャル諸島の核実験を扱う小説*Melal*の著者Robert Barclay とその映画スクリプトを執筆中のハワイ大学の Vilsoni Hereniko とホノルルで面会。スクリプトと小説の比較は、現在取りまとめ中の成果報告で触れている。**2 年目**：エディンバラ祭で南太平洋系(MAU、Black Grace、Kila Kokonut Krew)の舞台芸術の視察とインタビュー(Black Grace の Niel Iremia ほか)を行い、オークランド芸術祭でもマオリ・南太平洋系・中国系の演劇やダンスを視察。**3 年目**：後半はサバティカルを利用して現地調査や資料収集を行った。●カナダの芸術祭で MAU の舞台を視察。●ニュージーランドでは、オークランド大学所蔵の CND のマニュスクリプト資料を閲覧し、当時の文芸人も深く関わっていた非核南太平洋をめざす活動の歴史を考察するほか、環境社会活動家でもある画家 Claudia Pond Eyley や活動家 Maire Leadbeater にインタビューを行った。マオリ・南太平洋系の舞台芸術や環境をテーマとするアート展の視察、Pacific Arts Association のシンポジウムに参加して、情報交換を行った。●仏領ポリネシア（タヒチ）ではブック・フェスティバルに参加、ニューカレドニア・ヴァヌアツ・タヒチなどフランス語圏の作家たちにインタビューを行った。Litterama'ohi によるパフォーマンスも視察。●オーストラリアでは、中国系アボリジナル作家 Alexis Wright、アボリジナル劇作家 Jane Harrison と面会するほか、メルボルンおよびシドニーを拠点とするアボリジナルの劇団関係者に面会。**4 年目**：この年度は国内調査のみ。丸木美術館ほかで核や環境に関する日本人アーティストの作品展を視察。**5 年目**：サモアでの語学研修と現地調査。南太平洋移民系、インド系の演劇をウェリントンとオークランドで視察。キリバスのクリスマス島で行われた核実験に関する文献をフィジーの南太平洋大学図書館と NZ アーカイブで収集。※以上の調査に基づき、下記(2)～(5)について考察した。

(2)南太平洋系の舞台芸術

共同体形成において、演劇やダンスなどの舞台芸術が果たす役割は大きい。また近年は環境が主要なテーマのひとつとなっている。グローバリゼーションが諸島国家にもたらす影響について、作品を通して考察した。

① Lemi Ponifasio(MAU)の舞台芸術

ニュージーランド在住のサモア人舞台芸術家 Lemi Ponifasio が率いるダンスカンパニーMAU のシドニー公演視察とワークショップ参加をはじめとして、2 年目のエディンバ

ラ祭で上演された第一次世界大戦100年記念作品（*I AM*）、同年のニュージーランド祭における二作品（*Stones in Her Mouth* と *Crimson House*）、3年目のカナダの芸術祭での上演作品(*Apocalypsis*)、同年のオークランド芸術祭での上演作品を、前科研の最終年度に行ったPonifasioへのインタビュー、および作品制作過程における参与観察にも基づき考察し、その成果を国内学会発表⑦と国際学会基調講演⑥、国際学会発表②で発表し、論文⑤⑥と図書④(共著)にまとめた。

2年目の学会発表⑦「環境と芸術―ヴァヌアツ・キリバスのコミュニティシアターとレミ・ポニファシオ(MAU)の舞台芸術」では、ヴァヌアツの Wan Smolbag Theatre、キリバスの Te Toa Matoa などのコミュニティシアターの環境に対する取り組みと、それとは異なる次元で、Ponifasio の作品がどのように環境の問題を捉えているかを論じた。3年目の国際学会基調講演⑥‘Empires, Culture and Memories: Lemi Ponifasio’s Planetary Imagination and Performing Arts in Oceania’では、Ponifasioの惑星的想像力について、Spivak、Said、Appadurai の理論を参照して論じた。最終年の国際学会発表②‘Lemi Ponifasio’s Planetary Imagination and Performing Arts in Oceania’では、ダゲレオタイプ写真家・新井卓の作品などとも関連づけて論じた。

論文⑥「この世の最期のダンス？― Lemi Ponifasio の *Birds with Skymirrors* と太平洋の核文学」は、キリバス出身の6人のダンサーを含む南太平洋系のダンサーたちから構成される *Birds with Skymirrors* が、ダンスという抽象的な身体芸術の媒体を用いて、どのように環境や生の根源的なあり方について思考する空間を形成しているかを、オセアニアと日本の核や原発に関する文学なども視野におきながら論じた。論文⑤「オセアニアと暗黒舞踏―近代と土着、普遍性と個別性をめぐる考察―」は、MAU のダンス作品を中心にオセアニアにおける日本の舞踏の変容を、通底する精神性のあり方という観点から、近代と土着、普遍性と個別性といったテーマを軸に論じた。2年半ほどの研究の成果をまとめた図書④(共著)の担当章「オセアニアの舞台芸術にみる土着と近代、その超克―レミ・ポニファシオの作品世界と越境的想像力をめぐって」は、Ponifasio の一連の舞台作品をとりあげ、テロリズム、戦争、核実験、環境といった現代のグローバル社会の諸問題をどのような立ち位置から呈示しているかを論じた。Ponifasio の惑星的想像力を、Gayatri Spivak の「惑星性」や Edward Said の「文化」の概念といった理論的枠組を援用し、マオリの詩人 Hone Tuwhare、Roma Potiki やマオリの小説家 Witi Ihimaera、ニュージーランドの画家 Colin McCahon、フィジーの劇作家 Larry Thomas などの作品や日本の舞踏家の言葉にも触れながら考察した。

② その他の舞台芸術

マオリ劇作家による演劇作品、フィジー系舞台芸術家 Nina Nawalowalo の率いる The Conch の作品（*Masi*、*Marama*）や中国系やスリランカ系、インド系移民による演劇作品など、ニュージーランドにおける南太平洋系移民の劇作家による舞台作品について考察した。最終年に視察したスリランカ系劇作家による演劇 *Tea* は植民地時代から現代（そして未来）までのスリランカの歴史を「紅茶」を通して描く野心作である。この作品の分析は個別の論文としては発表できなかったが、現在、とりまとめ中の成果報告に含まれる。

(3)オセアニアにおける環境芸術と核文学

過去の植民地支配やグローバリゼーションの経済活動がオセアニアの諸国にもたらした様々な問題について、芸術家や作家たちがどのような文化的・歴史的コンテクストから声を発しているかを分析した。

① 環太平洋の環境芸術

オセアニアの環境芸術の調査は、3年目のサバティカルを利用して行い、4年目は、福島原発事故をテーマとする壷井明の連作パネル画《無主物》や富山妙子の震災と原発をテーマにした絵画ほか、環境をテーマとする日本の現代芸術家の作品にもふれる機会があり、現代オセアニアの環境芸術や文学との関係性を考察することができた。その成果は国際学会発表⑧、学会発表④「オセアニアの環境芸術と文学」、国際学会発表③‘Environmental Arts and Literature Across the Pacific’と論文③で発表した。

1年目の国際学会発表⑧‘Reading Japanese Nuclear Literature in Pacific Context’では、震災後の原発問題をめぐる核と環境に関する日本人の現代詩人や知識人たちの意識の表明を根底に、小田実の『HIROSHIMA』や「＜三千軍兵＞の墓」その他の日本の原爆・原発文学やドキュメンタリー映画を、オーストラリアのアボリジナル作家をはじめとするオセアニアの核文学との関わりにおいて論じた。

論文③「環境芸術と政治―鉱山開発、エコテロリズム、地球温暖化、非核南太平洋―」では、ニュージーランドとオーストラリアで活躍する南太平洋諸島出身のアーティストのうち、おもに現代の女性アーティストの作品を中心にとりあげ、タヒチ文学やアボリジナルの戯曲(*Ngapartji Ngapartji*、*Stolen*)などとも関連づけて、鉱山開発や民族紛争、森林伐採、核実験といったテーマに関して、それぞれの文化的・社会的・政治的背景から、どのように問題を提起しているかを論じた。具体的には、Claudia Pond Eyley のモルロアでの核実験をテーマとする絵画、フィジー系の演出家 Nina Nawalowalo の *Marama*、サモア系マオリの芸術家 Lonnie Hutchinson の核実験や生態系の変化をテーマとした作品、マラリンガでの核実験を表象したアボリジナル

のガラス造形作家 Yhonnie Scarce の作品、ブーゲンヴィル出身でオーストラリア在住の Taloi Havini のパングーナ鉱山をめぐる写真作品、マオリの芸術家 Natalie Robertson のワイアプ川流域の森林伐採がもたらす影響をテーマとする作品などを考察した。

② ニュージーランドの反核運動と芸術

本科研期間中には数回にわたって、オークランド市立美術館図書館とオークランド大学図書館で、ニュージーランドの画家 Colin McCahon に関する資料と 1960 年代後半までのニュージーランドにおける核軍縮キャンペーンの初期の活動に関するマニュスクリプト資料を検証した。その成果は論文④「Janet Frame と Colin McCahon―ニュージーランド 1960 年代の詩と絵画の邂逅―」と図書③(共著)にまとめた。

図書③(共著)の担当章「ジャネット・フレイム―アルファベットの外縁から見た世界」は、スコットランド系ニュージーランド人作家 Janet Frame の小説と詩に表象される南太平洋から見た冷戦期の核の世界を、画家 McCahon やマオリ詩人 Tuwhare、オーストラリアに移住したイギリス人作家 Nevil Shute のディストピア小説にも触れながら論じ、Frame がどのように 1960 年代の冷戦期の世界を見つめて精神医学の医療の暴力や冷戦時代の社会の言説、核の破壊的な力を批判し、自らの主体を形成していったかを分析した。

③ 仏領ポリネシアの文学

科研 3 年目に仏領ポリネシアのタヒチで開催されたブック・フェスティバルで、ニューカレドニア・ヴァヌアツ・タヒチなどフランス語圏の作家たちの講演を聴き、インタビューを行った。タヒチ人作家 Chantal Spitz と Litterama'ohi のメンバーによるポリネシアの歴史を表象するパフォーマンスも視察した。成果としては、Chantal Spitz の *Island of Shattered Dreams* (2007, フランス語原書 1991)を論じた上述の論文⑥のほか、上述の論文③で、Spitz の新作 *Cartes Postales* (2015)のフランス語の短編‘Joséphine’に触れている。Spitz については、現在、とりまとめ中の成果報告でより詳細に論じる。

④ オーストラリアの環境文学

オーストラリアの中国系アボリジナル作家 Alexis Wright については、別個に詳しく検討した。その成果は、図書⑤(共著)と図書①(共著)、および論文①にまとめた。

図書⑤の担当章‘Indigenous Knowledge and Global Translation: Reconstruction of Australia through Aboriginal Imagination in Alexis Wright’s *Carpentaria*’は、長編小説 *Carpentaria* をとりあげ、アボリジナルの想像力に根ざしながらも、トランスナショナルな視点で、Wright がいかに現代のオーストラリアをとらえているか、先住民の知のグローバルな翻訳という問題を論じた。多国籍資本企業による鉱山開発をめぐる白人入植者とアボリジナルの共同体の対立、サイクロンによる被害を描くこの小説を、ポストコロニアル・エコロジー小説として分析した。図書①は、*Carpentaria* を国籍の異なる研究者が作品のトランスナショナルな要素に注目して論じる論集である。担当章‘Survival, Environment and Creativity in Global Age: Alexis Wright’s *Carpentaria*’は、前科研で行ったクィーンズランド州北部での現地調査に基づき、2011 年の東日本大震災後のオーストラリアと日本の核をめぐる関係に注目し、鉱山開発による汚染を見つめる登場人物のまなざしに、Wright が編集した *Take Power Like This Old Man Here* のウラン鉱山を描写した‘Warlpiri visit Ranger’を重ねて論じている。オーストラリアやニュージーランドの核を描いた戯曲・小説や、日本のオロチ伝説にも触れる。その他①の「巻頭言」(『南太平洋評論』第 33 号)では、Wright の新作 *Tracker*(2017)の短評をしている。

⑤ ミクロネシアの文学

マーシャル諸島出身の若手女性詩人 Kathy Jetnil Kijiner の詩とハワイ在住アメリカ人作家 Robert Barclay のマーシャル諸島を舞台とする小説 *Meḷaḷ: A Novel of the Pacific*、およびマーシャル諸島のコミュニティ映画を分析。戦争、核実験、ミサイル実験、地球温暖化など、植民地時代からグローバリゼーションの現代まで、大国の活動の負債を負うグローバル・サウスとしてのマーシャル諸島のあり方は、キリバス共和国などのほかのミクロネシアの諸島国家の歴史とも共通する。成果は論文②と学会発表①にまとめた。

論文②「マーシャル諸島から太平洋を越えて ― Robert Barclay の小説と Kathy Jetnil-Kijiner の詩を中心に―」では、マーシャル諸島を舞台にした Barclay の小説 *Meḷaḷ* と Jetnil-Kijiner の詩集 *Iep Jāltok: Poems from a Marshallese Daughter* および朗読パフォーマンスをとりあげ、マーシャル諸島のミッドコリドー地帯の軍事事情を冷戦期の日本映画『生きものの記録』などにも触れながら論じた。植民地支配と戦争、冷戦期の核実験とミサイル実験、現在の地球温暖化による被害などの諸問題、独立後もアメリカの「帝国」の軍事的支配のもとにある現代のマーシャル諸島の生活を二人の作家がどのように描くかを分析した。

(4)メラネシアにおける独立期と現代の文学

科研 1 年目に、パプアニューギニアにおいて独立前後に英語とトク・ピシンで書かれ上演/報道された演劇やラジオ・ドラマの文献調査、資料収集を行った。この分析に関しては、まだ個別の論文としては発表していないが、現在、とりまとめ中の成果報告のなかに含まれる。

(5)サモア語の学習と共同体での参与観察

科研最終年には、ハワイ大学が提供する 1 か月半のサモア語イマージョンコースをマ

ノア校とサモアのマノノ島で夏に受講し、これまで独学であったサモア語の強化を行い、A＋の評価を得た。年度末に視察した南太平洋系移民作家による舞台芸術の視察では、その成果が確認できた。マノノ島滞在中は先住民医療(taulasea)についてのインタビューも行った。

(6)成果の評価と今後の展望

成果のうち、図書④(共著)は、Ponifasioの作品を包括的に論じた国内外で初めての論文である。また、Frame の詩を核の問題と絡めて論じる論稿は国内外でもほとんどなく、Frame の初期小説と詩を論じた図書③(共著)の担当章は書評(『女性とジェンダーの歴史』第5号、2018年3月、90-92)で高い評価を得た。本科研期間中には、Ponifasio や Frame に関する英語論文は発行できなかったが、今後の課題とする。

論文②を発展させて、2019年に出版予定の共著『トランスアトランティック・エコロジー』（仮題）でも成果発表することが決まっている。本科研期間中には、マーシャル諸島での現地調査を行うことはできなかったが、これは後続研究で行っていきたい。

2018年5月発行の論文①「人新世のエコクリティシズム―Wu Ming-Yi、Alexis Wright、Amitav Ghosh を中心に―」は、本科研の成果に基づき、今後展開させていきたい後続研究の見取り図の一部となる論文である。気候変動や核汚染を描いた Alexis Wright の近未来ディストピア小説 *The Swan Book* を台湾の環境作家 Wu とベンガル系インド人作家 Ghosh の作品やエッセイと比較して論じた。なお、Wu Ming-Yi と Alexis Wright の比較研究は、2018年6月のニュージーラド・オーストラリア文学会春季大会、および2018年11月に開催予定の台湾の環境文学学会(ASLE)での発表が決定している。

前科研ではポリネシアにおける調査が中心であったが、今回はポリネシアのフランス語圏（仏領ポリネシア）で研究者・作家との交流をもつことができた。ニューカレドニアはまだ渡航する機会が得られず、これは今後の課題となるが、タヒチでの文学祭ではニューカレドニアのカナックの作家とも交流をもつことができた。

前科研で基礎を固めたマオリ語に加えて、本科研期間中には、サモア語、タヒチ語、フランス語、ビスラマ語、トク・ピシンなどの言語の学習も行ったが、若手研究時代のように継続して特定の言語の学習にまとまった時間をあてることが難しく、少しずつしか進まないのが現状である。これらの言語でのテクスト分析には英語やマオリ語に比べて、かなりの時間を要するが、今後もライフワークとして、オセアニア諸語の言語能力の強化をめざす。最終年度には、1か月半という短期間とはいえ、ハワイ大学のサモア語のイマージョンコースを受講できたこと、また離島のコミュニティにおける社会規範のもとに営まれる日常生活の文化の様相を参与観察できたことは、文学や舞台芸術作品の文化的基盤の考察にとって、大きな意味があった。ニュージーランドの南太平洋移民の舞台芸術などで用いられるサモア語に関しては理解できるレベルに達しているが、児童文学や短編以外のサモア語で書かれた文献（長編小説や歴史書を含む）を分析するにはまだ力不足であり、これらの資料の分析は、今後の課題としたい。

本科研では、メラネシアにおける文献調査と、ミクロネシアの文学の分析も行った。本科研でのパプアニューギニアでの調査は首都圏に限られ、パプアニューギニアの地方の演劇活動に関しては、調査を行う余裕はなかった。これは今後の課題となるだろう。収集した文献もまだ未分析のものがあり、個別の論文として、発表したものはないが、現在、とりまとめ中の成果報告のなかで分析予定である。

将来的に翻訳による新しい文学の紹介も念頭におき、A. Wright の *Carpentaria* と R. Barclay の *Melal* の翻訳訳草稿をある程度準備することもめざしていたが、作品の分析や論文執筆は達成できたが、*Carpentaria* は翻訳の非常に困難な大作であるため、オーストラリア文学の研究者3名と共訳作業を行うことになった。これまでに用意した草稿をすり合わせる共同作業を最終年度の後半に始めたところであり、まだ大部分はこれからである。Robert Barclay の *Melal* は、出版社に提出した翻訳企画書が受理され、今後はマーシャル語に詳しい研究者などの協力も得て、草稿の完成と、出版計画を遂行していく。

海外調査先で学会や芸術祭への参加、インタビューなどを通して、研究者、作家、芸術家たちとの接触をもち、本科研 3 年目（H27 年 10 月）からは、国立民族学博物館の共同研究プロジェクト「放射線汚染をめぐる『当事者性』に関する学祭的研究」（代表：中原聖乃）の構成員としても、学問分野を超えた研究者との情報交換を行う機会があり、前科研に比べて、飛躍的に研究のネットワークが広まった。本科研期間中に開拓した国内外での研究のネットワークは、今後、国際共同研究に発展させたい。また、これまで個別の論文や共著として発表してきた本科研の研究成果は、今後、補足の調査を行いながら、総合的にまとめる予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

① 小杉 世「人新世のエコクリティシズム―Wu Ming-Yi、Alexis Wright、Amitav Ghosh を中心に―」『ポストコロニアル・フォーメーションズXⅢ：言語文化共同研究プロジェクト 2017』大阪大学大学院言語文化研究科，査読無，2018 年 5 月、

pp. 73-85
② 小杉 世「マーシャル諸島から太平洋を越えて―Robert Barclay の小説と Kathy Jetnil-Kijiner の詩を中心に―」『ポストコロニアル・フォーメーションズXII：言語文化共同研究プロジェクト 2016』大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2017 年 5 月、pp. 27-40
DOI: 10.18910/62011
③ 小杉 世「環境芸術と政治―鉱山開発、エコテロリズム、地球温暖化、非核南太平洋―」『ポストコロニアル・フォーメーションズXI：言語文化共同研究プロジェクト 2015』大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2016 年 5 月、pp.15-26
DOI: 10.18910/57320
④ 小杉 世「Janet Frame と Colin McCahon―ニュージーランド 1960 年代の詩と絵画の邂逅―」、『ポストコロニアル・フォーメーションズX：言語文化共同研究プロジェクト 2014』大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2015 年 5 月、pp.49-60
DOI: 10.18910/54335
⑤ 小杉 世「オセアニアと暗黒舞踏―近代と土着、普遍性と個別性をめぐる考察―」『ポストコロニアル・フォーメーションズIX：言語文化共同研究プロジェクト 2013』大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2014 年 5 月、pp.13-22
⑥ 小杉 世「この世の最期のダンス？―Lemi Ponifasio の *Birds with Skymirrors* と太平洋の核文学―」『ポストコロニアル・フォーメーションズ VIII：言語文化共同研究プロジェクト 2012』大阪大学大学院言語文化研究科、査読無、2013 年 05 月、pp.23-36

〔学会発表〕（計 9 件）
① 小杉 世「マーシャル諸島をめぐる小説と詩にみるコロニアリズムと環境の問題」日本オセアニア学会関西地区例会、2018 年 1 月 20 日
② Sei Kosugi, 'Lemi Ponifasio's Planetary Imagination and Performing Arts in Oceania', The Pacific Arts Association (PAA) Conference: Making the Invisible Visible. National University of Samoa, 27 Nov-1 Dec, 2017.
③ Sei Kosugi, 'Environmental Arts and Literature Across the Pacific', The 23rd annual conference of the New Zealand Studies Association (NZSA), University of Strasbourg, 7-10 July, 2017.
④ 小杉 世「オセアニアの環境芸術と文学」第 34 回日本オセアニア学会研究大会、2017 年 3 月 26 日～27 日
⑤ 小杉 世「ニュージーランドから見た太平洋核実験―キリバス、仏領ポリネシアを中心に」国立民族学博物館共同研究プロジェクト研究会、2016 年 6 月 11 日
⑥ Sei Kosugi, 'Empires, Culture and Memories: Lemi Ponifasio's Planetary Imagination and Performing Arts in Oceania', The 21st annual conference of the New Zealand Studies Association (NZSA), 1-4 July 2015, University of Vienna.（基調講演）
⑦ 小杉 世「環境と芸術―ヴァヌアツ・キリバスのコミュニティシアターとレミ・ポニファシオ(MAU)の舞台芸術」第 32 回日本オセアニア学会研究大会、3 月 27 日～28 日
⑧ Sei Kosugi, 'Reading Japanese Nuclear Literature in Pacific Context', The 16th Triennial ACLALS Conference, St Lucia, 9 August, 2013.

〔図書〕（計 5 件）
① Sei Kosugi, 'Survival, Environment and Creativity in Global Age: Alexis Wright's *Carpentaria*', Lynda Ng, ed., *Indigenous Transnationalism: Essays on Carpentaria*. Giramondo, June 2018 (forthcoming). 256 (pp. 35-58).
② 小杉 世「『英語』を脱構築する―オセアニア文学・文化の視点から」、今尾康裕・岡田悠佑・小口一郎・早瀬尚子 編『英語教育徹底リフレッシュ―グローバル化と 21 世紀型の教育』開拓社、2017 年 4 月、313（pp.287-295）
③ 小杉 世「ジャネット・フレイム―アルファベットの外縁から見た世界」、三神和子編著『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』彩流社、2017 年 3 月、261＋36（年表・索引）（担当章 pp.135-179）
④ 小杉 世「オセアニアの舞台芸術にみる土着と近代、その超克―レミ・ポニファシオの作品世界と越境的想像力をめぐって」、栂 正行・木村 茂雄・武井 暁子(編)、『土着と近代――グローカルの大洋を行く英語圏文学』音羽書房鶴見書店、2015 年 9 月、362（pp. 245-284）
⑤ Sei Kosugi, 'Indigenous Knowledge and Global Translation: Reconstruction of Australia through Aboriginal Imagination in Alexis Wright's *Carpentaria*', G.N. Devy, Geoffrey V. Davis, K.K. Chakravarty eds., *Performing Identities: Celebrating Indigeneity in the Arts*, Routledge, 2015, 382 (pp. 270-285).

〔その他〕
① 巻頭言『南半球評論』Vol.33、2018、p.4
② ホームページ
https://sites.google.com/site/seikosugi/

６．研究組織
(1)研究代表者
小杉　世（KOSUGI, Sei）
大阪大学・大学院言語文化研究科・准教授
研究者番号：40324834